

実験タイム 読んでみよう、視てみよう、  
語ってみよう、聴いてみよう。。

#### 4. くらべてみよう『ごんぎつね』-4つの味わい方-

清水 均

実験タイム第1部では、『ごんぎつね』という一つの作品(テキスト)を色々な形で味わってみることにしましょう。絵本の黙読、読み聞かせ、紙芝居親父による実演、DVD視聴と様々なメディアを通じて、同じ『ごんぎつね』という作品を享受してもらいます。

最初に絵本版『ごんぎつね』<sup>1)</sup>を、参加されているみなさんそれぞれで黙読してみてください。絵と文字だけによって表わされる作品世界を、自分のペースで読んでみましょう。黙読の時間は特に設定しませんので、皆さんの好きなように読んでください。読み終わった人は黙って手を上げてください。ではどうぞ。

(参加者全員は、一人ひとりに  
予め配られていた絵本の黙読  
を始める。早い人では5分もし  
ないうちに手があがる。読書  
のペースは人それぞれで、読  
み終わった順にパラパラと手  
があがり、10分ほど経過した  
ころ最後の一人が読み終わっ  
た。)



図 4-1 絵本版『ごんぎつね』

次は私(清水)による「絵本の読み聞かせ」です。「読み聞かせの図書館のお兄

さん」になったつもりで読んでみます。

(エプロンを身につけた清水先生は、黙読で使ったものと同じ絵本を開き、一生懸命に声色を使い分けながらページをめくり読み進める。清水先生を囲んでいる聴衆は、初め戸惑ったり違和感に苦笑していたが、次第に引き込まれ静かに聞き入る。)

次は紙芝居の実演を見てみましょう。「見ます」というよりも、「参加します」と言った方がふさわしいでしょう。紙芝居親父に扮するのは渡辺先生です。ここでは、「実演」という言葉の通り実際に渡辺先生が『ごんぎつね』の紙芝居を語るわけですが、「実際」に「演じる」のは語り手という単なる物語世界の伝達者としての役としてだけではなく、「親父」としての役も「演じる」のです。つまり、この「親父」はあくまで対面する「子供たち」（今回の参加者）にとっての「親父」であって、聞く側の「子供たち」に対して「親父」としての尊厳や怪しさや面白さ、更には優しさなどを発揮しながらしかもお金をもうけなくてはならない。つまりは渡辺先生としてではなく、「親父」としての人格が聴衆たちと交流し勝負しなければならないわけです。

ではどのような交流、勝負が行われるのでしょうか。早速それを体験してみましょう。

(昭和30年代を思わせる雰囲気作りに本気で取り組んだ渡辺先生は、大宮の博物館から借りてきた昭和30年代の昔風の自転車に、実際に使われていた紙芝居セット(枠、拍子木)<sup>2)</sup>を乗せ、おまけに麦わら帽子に肩にはタオルといういで立ちで登場した。一斉に笑いが起こるなか、渡辺先生は自転車



図 4-2 紙芝居版『ごんぎつね』

の荷台に紙芝居用の舞台を組み立て、引き出しから飴を取り出して参加者に配ったあと、紙芝居『ごんぎつね』<sup>3)</sup>の後半部分を演じた。) )

では、最後にDVDによる『ごんぎつね』<sup>4)</sup>を味わってみましょう。

(前方のスクリーンに画像が映し出され、音声が流れ始める。語り声は低く落ち着いた男性の声である。背後からどこか物悲しさを感じさせるBGMが流れると、その分、紙芝居とも絵本とも異なるしんみりした雰囲気会場に生まれた。)



図 4-3 DVD 版『ごんぎつね』

皆さん、いかがでしたか。メディアの違いによって作品世界の色合いが大きく異なることを実感してもらえたと思います。特に、語り手という「キャスト」の性格の違いによって作品に対する印象がかなり違い、読者である「ゲスト」はそれぞれの「キャスト」の違いによって全く異なる「読書体験」をすることができるということがおわかりいただけたかと思います。

黙読では、もしかしたら語り手やごん、兵十といった登場人物の声をそれぞれの声として想像しながら読み進めていったかもしれません。それらの声は読者一人一人が想像(創造)した声であるのですが、作品の中で伝えられる情報は語り手によってもたらされるものであり、読者はその見えない語り手に導かれるように物語を読み進めることになります。

絵本の読み聞かせでは、読み手である私の声によって、物語が進められました。読み手の私が想像(創造)した声や人物像によって物語が導かれるという意味で、読み聞かせは、黙読とはひと味違った他者との交流の場と言えるでしょ

う。

紙芝居では、まず「親父」は飴玉を配るという手を使いました。(勿論今回は無料です。)そして、物語を語るのを途中でやめてあの手この手で聴衆を引き込むために雑談をしたり話をふってきました。一方、聴衆の方も黙っていません。さっきまで「読み聞かせ兄さん」だったはずの私がいつのまにか聴衆の一人としてヤジを飛ばしました。手伝いの学生までもが「親父」に文句を言ったりしましたね。

こうして「親父」と聴衆のコミュニケーションの中で物語が語られていきました。今回は渡辺先生が「親父」に扮しましたが、もしこれが若松先生や河島先生が「親父」だったら全く違った物語世界が伝えられることになったのではないのでしょうか。つまり、紙芝居のような「実演」の場合は語り手によって物語世界の色合いも違ってくるし、更には、語り手と聴衆によって生成されるその場の雰囲気、更には氣候などによっても物語世界が違ってくるというライブ感が紙芝居には存在するし、それこそが紙芝居の生命だということができるのではないのでしょうか。

勿論、「絵本の読み聞かせ」にもそうしたライブ感があります。子供たちとの会話もあるし、場合によっては飴の一つも与えるかもしれません。しかし、「絵本の読み聞かせ」と紙芝居には決定的な違いがあります。最も違うのは紙芝居では「ひき」という、紙を変える際のタイミングをはかる絶妙な技があり、そのことが聴衆のドキドキ感を生み出すのに大いに関与するということです。1ページ1ページを読みきってページをめくる読み聞かせとはここが大きく異なり、この「ひき」の技が聴衆とのコミュニケーションを図るに際し決定的な役割を持ち、だからこそ、紙芝居はより深く聴衆とのコミュニケーションが可能となりライブ感も増すこととなるのです。そして、その意味で紙芝居の語り手は変幻自在な存在で他のどのメディアよりも読み手(聴衆)にとっての「今」を現前させることが可能になるのです。

DVDは静止画像に語りが加わるというものでしたが、語り手には聞き手が

見えていません。読み聞かせや、紙芝居の実演と比べると一方的な感じを受けたのではないのでしょうか。そのせいか、みな「見入る」ような姿勢になっていました。静止画像という点でこのDVDは絵本に近いといえますが、しかし語り手との直接的な交流はないメディアだということができるでしょう。

さて、次は「実験タイム第2部自分で作ろう名場面」です。やはりここでも『ごんぎつね』を題材にします。既に色々な形でこの作品世界に触れてもらっており、同じ『ごんぎつね』であっても受け取り方によってどれだけ味わいが違うのかを実感してもらっています。そうした実感を活かして今度は作品を受け取る側ではなく、創造する側に立ってもらいます。

## 注

- 1) 新美南吉『ごんぎつね』いもようこ絵 2005.5 金の星社 39p.
- 2) 昭和30年代に紙芝居用に使われていた自転車と紙芝居用舞台セットは、さいたま市立博物館より拝借した。
- 3) 新美南吉『ごんぎつね』諸橋精光脚本・画 2005.1 鈴木出版 紙芝居1組24枚.
- 4) 新美南吉『ごんぎつね』黒井健絵 大滝秀治語り 2005.4 ポニーキャニオン ビデオディスク1枚(24分):DVD